

今日の福音書は、マタイによる福音書の中でも特に「山上の説教」として有名な部分、5章から7章までの教えの冒頭に当たる、「八つの幸い」あるいは11節のものを加えて「九つの幸い」と言われる部分を読みました。これから、2月12日の顕現後第6主日まで、この続きの5章の特に倫理的な教えを読むこととなります。

しかし、イエス様のこの山上の説教は、とても実行が難しい要求なのです。私たちが口で「ばか」とか「愚か者」とか言うと、その人は法廷に引っ張って行かれたり、火の地獄に投げ込まれる。みだらな思いで他人の妻を見る者は、心の中で姦淫を犯している、という具合です。

今日の福音書の最初の方に「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」という聖句がありますが、本当に貧しい人が幸いだと言えるのでしょうか。

私たちが手にしている「聖書 新共同訳」が出る前に、1978年、新約だけが出版された「共同訳」の聖書では、その言葉の意味を深く研究して「ただ神により頼む人々は、幸いだ。天の国はその人たちのものだから。」と訳しています。貧しい、ということそのままで受け取ったら、誤解が生まれます。

どうもイエス様の教えというのは、その言葉自身が極端で、私たちには実行が難しいことを言われているように思えるのです。荒れ野で空腹になり、「石をパンに変えてみろ」、と悪魔に誘惑された時、「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」という、モーセの言葉で答えられましたが、旧約聖書の中の箴言という書物には、面白い言葉があります。

『むなしいもの、偽りの言葉を／わたしから遠ざけてください。貧しくもせず、金持ちにもせず／わたしのために定められたパンで／わたしを養ってください。飽き足りれば、裏切り／主など何者か、と言うおそれがあります。貧しければ、盗みを働き／わたしの神の御名を汚しかねません。』（箴言30：8～9）

このように、私たちは聖書を読む時、私たちに実行不可能な言葉を、無理して受け入れようとするのではなく、他の関連した箇所などを見比べながら、『自分に都合のいい箇所』ではなく、『自分にも納得のいく箇所』を探るような努力が必要なのではないか、と思います。

今日の旧約聖書には、「ミカ書」が選ばれています。彼はイエス様より750年くらい前に、エルサレムの南西35キロくらいのあるモレシェトという村の出身で、そこでおもに活動していたことが、ミカ書の最初に書かれています。彼と同じ時代に、有名な預言者イザヤが王様の宮殿にいて、世の墮落を指摘しましたが、ミカは田舎の貧しい人々の視点から、権力者や都会の豊かな人々の墮落に対して、神様の裁きを預言しました。彼は優れた文章を書く人だったようです。そして、5章の最初では、ベツレヘムからイスラエルを治める者が出ることを語っています。ダビデがベツレヘム出身であることは知られていましたが、このミカの預言はダビデより300年くらい後ですから、クリスチャンはこれをイエス様の誕生と結び付けて考えます。

そして、その文章のうまいミカが、その実力をいちばんよく表しているのが、今日の旧約。「主の告発」と言われる箇所です。

1節から5節までは、神様がイスラエルの先祖たちをいかに大切に守って来たか、思い出しなさい、と言います。そして、それに報いるためには、イスラエルの人々はどうしたらいいか、それを6節から8節まで語っています。

神様に報いるために大切なことは、たくさんの牛や羊や油の犠牲でもなく、まして人間の子どもを捧げることでもない。何が正しいことで、神様が要求されていることかは、お前に告げられているだろう。

『正義を行い、慈しみを愛し へりくだって神と共に歩むこと、これである。』とハッキリ書いています。ここには、旧約聖書の教えの集大成があるように思えます。

聖書の中には多くの教えが書かれていますが、どこも重要だ、というのではなく、このミカ書6章8節のような、要約された箇所が所々にあることを私たちは知っておく必要があるでしょう。

今日、私は預言者のミカが旧約聖書の集大成をまとめたように、新約聖書の中に示された、「これが父なる神様の御心だ。」というものを話したいと思います。

これは、私が神学生の時、先生からこんなことを言われたことがあります。

『私には神様の御心がわかりません。』という人が時々いるけど、それは、自分が悩んでいる時、どちらを選ぶことが正しいか、という具体的な問題で、選択に困っているからだろう。しかし、神様の御心というのは、聖書にちゃんと書かれているのだから、『御心』という言葉をもとから探していけば、ハッキリ書かれているところが出てくるはずだ。」と言われたのです。

皆さんは、いつも主の祈りを唱えておられると思いますが、それじゃ「御心が行われますように」とは、どのようなことを願っているのでしょうか？ 「どうぞ神様のなさりたいように、してください。」というのは、無責任であって、本当は、御心が何なのか、私たちは知って、それがこの地上でも行われるように、私たちが働く義務があるのです。

そこで、「御心」ですが、新約聖書には82回、「御心」という言葉が出てきました。ところが、その中身の意味を語っているのは、探したのですが、福音書に2か所出てきていました。他にも手紙の中に明記されているところがあるかもしれませんが、イエス様の言葉として福音書に書かれているものを書き出してみます。

ひとつは、迷い出た羊の話です。マタイ18章10節から14節。

これは有名なたとえ話なので、皆さんよくご存じでしょう。100匹の羊が出てくるお話です。

『◆「迷い出た羊」のたとえ

「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言うておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

失われたものが戻ってくること、ここに神様の御心がある、ということになるでしょう。

もうひとつは、ヨハネ福音書6章38節から39節

『わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。』

ここにも失わない、という言葉が出てきました。

結局、神様の御心というのは、アダムとエバの失樂園以来、ずっとエデンの園から遠ざかっている人間をもう一度そこに戻すことであり、そのためにイエス様がこの世に送られてきた、ということになるでしょう。「神に逆らう者は滅んでしまえ」などとは神様は考えておられない、ということです。

このような神様の御心、イエス様の役割を知って、私たちキリスト者がこの世に居るのだ。私たちがキリストに似たものとなって、その役割を負って、クリスチャンとして働くのだ、ということを理解できるなら、教会の宣教活動もそれとつながりがあるということになりませんか。

ミカという預言者は、今日の箇所でも、『正義を行い、慈しみを愛し へりくだって神と共に歩むこと、これである。』とまとめているのとも、関連があるように思えるのですが、どうでしょう。

今日は、私たちの使命をハッキリ意識して、今年何をするか、真剣に考えていただきたいと思います。